

石川孟高筆少女愛猫図とその原画



今春の名品展の後期（4月20日→5月16日）に、石川孟高筆「少女愛猫図」（絹本墨画・写真右）が陳列されます。最近の坂本満氏の研究により、この絵の西洋原画が明らかになりましたので、ここではそのお話をいたしましょう。

江戸時代は鎖国と封建制の時代でした。ただ、当時でも長崎において中国やオランダと交易していましたので、日本の美術は常に海外からの新しい刺激を受けました。この時代の絵画に対する西洋の影響は、18世紀後半から著しくなります。当時の画家たちのなかには、西洋から輸入された銅版画や図書の挿絵を見て、その迫真的表現に驚嘆し、西洋画法を習得しようとした人びとがありました。石川孟高（生歿年未詳）は兄の石川大浪（1817年歿）とともに、江戸時代後期に活躍した洋風画家です。

写真左は英国18世紀の女流肖像画家キャサリン・リードの絵を、同じく英国の版画家ジェームズ・ワトソンがメゾチント（銅版画の一種）にした「ミス・トリンマー像」で、明らかに「少女愛猫図」の原画です。この英国の版画はオランダ船により遠く長崎へ運ばれ、ついで江戸にもたらされて、孟高の眼に触れたのでしょう。

「少女愛猫図」の画面下には、Miss Trimmer door Leeuw berg（トリンマー嬢、レーウベルフ画）とサインがあります。Miss Trimmer は原題を写しているため英語ですが、それ以下はオランダ語で、いかにも江戸の洋風画らしいところがあります。Leeuw Berg（獅子山）は孟高のオランダ筆名で、兄大浪のTafel Berg（机山）とともに、アフリカ南端の希望峯に並存する山名からとったものです。海外渡航の不可能であった当時において、この兄弟画家は希望峯にちなんだ筆名を名ることにより、そのかなたにある西洋への夢を託したのでしょう。

彼等とほぼ同時代の司馬江漢と亜欧堂田善が、西洋画法による日本の風景や風俗を描いたのに対し、石川兄弟の作品は大い西洋版画の模写です。しかし、「少女愛猫図」に認められるように、彼等は西洋の陰影法による立体表現に対し、強い関心を抱いていました。また、本来の水墨画法は主観的表現のために東洋で発達したのですが、それを客観的表現に転用するという新傾向が見られます。

季刊 美のたより No.35

昭和51年 3月10日

発行 大和文華館